

ヨコとタテの建築論

モダンヒューマンとしての私たちと建築をめぐる 10 講 青井哲人

第1部 ヨコとタテーヒトは世界を組み上げる（モダン・ヒューマン論）

第1講 互換と累進ーモダン・ヒューマン、その力のぎこちなさ

「アナロジー analogy」（類推）…特定の対象 A にある何らかの情報を、別の対象 B に移すような認知過程。人はそれが起こることに抵抗できない。アナロジーと累進性

何かをつくりことは、すべからく、すでにあるものの組み合わせを変えること。組み合わせの切っ掛けは、アナロジーによって不断に立ち上がる。

アナロジーが立ち上がるたびに、私たちは世界に多数・多重の分類をつくっている。

（この画像の群は、洞窟の立体的な地形的特徴とも組み合わせられていく。部分から全体へ、下から上へと積み重ねられた階層的な分節が洞窟の中に生み出されている。どこかに橋をかけることにより、少しだけ変貌した世界には、潜在的な橋がまた静かに増えている。これが累進性の秘密ではないか。）

アナロジーは、見る、描く……世界を組み替え、独自に組み立てる営みの根本。

互換性の話がよくわからずまだまとめられていない。

第2講 形態と内容ー地上の幻

リプレゼンテーション（表象）…あるものが、他の何かを代わりに表すことを指す用語。

何かを表す役割をするもの…基本的にカタチがあればよく、音や文字でも大丈夫。

「イス」と「キス」、「馬がパカパカ走る」と「人がトボトボ歩く」は似ている。 音や文字の並びのカタチが似ている。

この形態を F(form) とする。

これとベアをつくる内容を S(substance) とする。

日常的に、S→F（S は内容、F は形態）問題に答えを出している。

相似と類似

「似ている」には、「相似」と「類似」の2種類がある。

相似ー「A と B が似ている」。両者は互いに似ているだけ。

類似ー「B が A に似ている」。A は「母型」であり、B はそれに似ている。ゆえに認識の上では、B は A の「複製」、極端に言えば劣化版。

建築は現実の相似の風景の中に何かを作り出そうとする。

S を喚起させるにふさわしい形態としての F を立ち上げてやらないければ、S は頼りなく消えて周囲に溶けだしてしまう。

第3講 総体と絶対ー数と幾何学の魔法

数は、昔はモノを数える身体的な行為。現在は、「数」（2 など）という抽象的概念が専攻し、モノに当てはめられる。

数は、概念の君主制をつくるコトバと同じであるが、計測のモジュール（単位）になる性質を持つ。

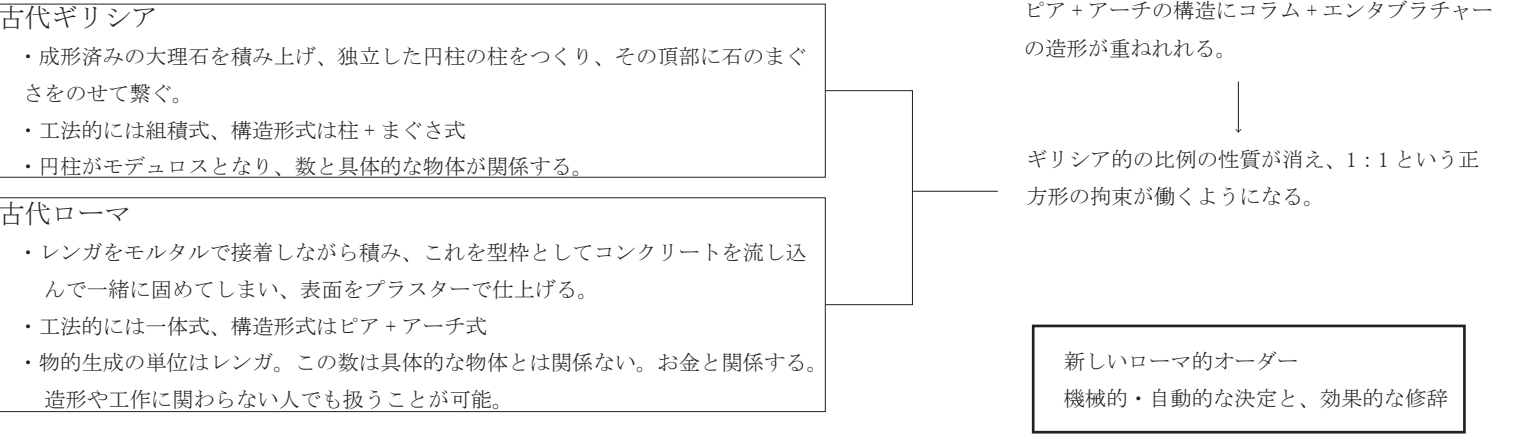
シュムメトリア（sym 共通、metria 計測する）…複数の部分の大きさが、ともにひとつの大きさによって測れることを意味する。

ギリシア寝殿を例に説明、

古代ギリシア以来、ヨーロッパでは「自然」とは神がつくったものすべてとされている。

自然は「数（アリスモス）」、人工物は半端な「量（メリコテス）」とされ、建築家は、シュムメトリアを徹底することで、寝殿も賛美すべき自然界と同じ原理を体現するものになると信じていた。でも実際は倍数でつくれるほど建築は単純ではなく、分数を用いたり、すっきりした数で処理できない部分もあった。

そして、女性的なプロポーションや男性的なプロポーションなども存在し、多様なカタチが存在した。



第6講 平衡と進化ーわたしたちは想念のなかで都市建築を分解する

建て替える

台湾

- ・Sは共有物として都市固有のものとなる（Sはかたい）が、Tは私有で代謝し続ける（Tはやわらかい）。台湾の時間のカタチ、動的平衡（細胞は入れ代わり、形態の特徴は維持）（町屋が町屋となるとき）
- ・動的平衡が変化し、元の組織が自らを別の組織へと進化させる（町屋が10階建てのビルになるとき）

時間のカタチ

時間とはモノの配列関係が変わっていく、その速度やリズム、一言で言えば、動きのパタンへの私たちの感受性とか認識枠組みみたいなもの。（筆者の主観）

近代人は、時間は、直線的で、無限に進み、均等な目盛が打たれていて、後戻りはできないと考えている。（近代社会、資本主義的思想）

ヨーロッパには、クロノス（時間）・トポス（空間）・ビオス（生命）で知の全体を分類している。ここには個別性がある。

第3部 タテはいかに可能かーバラバラな世界に（アーキテクト論）

第7講 饒舌と沈黙ー喧騒のなかのサイレンス

- 19世紀ジャングル
- 1、伝統なき主役の登場
- かつて建築家にカタチを求めていたのは、世俗的な権力と宗教的な権力。そういった権力にカタチを与えるのが建築だった。
- 中流層、資本家や、庶民層も公共政策に何らかのカタチを要求する層になった。（今はじめて「ふさわしい」を考え始めた人たち）
- 2、アトム化した人々の流動性（モビリティ）
- 19cのヨーロッパでは、村落、都市、大家族など伝統的共同体が壊れバラバラの個人が地理的空間と社会的関係の中を移動していく。＝アトム化

ティッシュから解き放たれたことにより、社会がカオスにならないのは、社会がアトムを集めたり流したりする様々な仕組みをつくっていたから。

様々な建物種類はそれを運営する人、使役される者、利用する者からなる「小社会」（オルガン）。

近現代の建築家は、多種多様なオルガンに「ふさわしい」カタチを与える、オルガン型都市の造形者。

この後、都市の規模は大きく膨らみ、新しいテクノロジー、産業が生まれた。技術の変貌は建物のカタチを変え、次第には、近代テクノロジーの性格（S）にふさわしい表現（F）が考えられるようになった。このSは勝手に増えていくので、建築としては手段を尽くし、Fのインフレーションが起きていた。

近代建築

伝統的な表象体系に対して、機能、構造上の要求にのみ従えば、その結果として、カタチは必然的に生まれる。これこそが最も美しい近代的なカタチであるとした。

機能や構造は装飾を求めないので、Fはプレーンな立体になり、表象的には「沈黙」する。「饒舌」から「沈黙」へ

第8講 過去と未来ー世界が壊れるとき、建築家の立つ位置

近代建築を過去と未来から話すと、かつての統制は、シンメトリーをつくる軸、均質な格子、整数比などの平面や立面の制御だった。

じつは、これが完成したのは19世紀。最も上位の中心軸に対して、一段階副次的な軸、さらに下位の軸というように、伝統的なシンメトリーを階層化する方法が洗練され、どんなに大規模で複雑な建物でもすべての細部が段階的に高次の秩序にまとめられ、最終的に中心軸へと統合されることになる。

「求心的構成」



線、面、ボリュームなどのいくつかの異なる方向への運動を示し、全体として遠心的、発散的になるようにする。

第9講 単純と複雑ー多元的な世界をつかまえるには

饒舌ー沈黙ー複雑（コンテクスチュアリズム）

人にも13にも見える、1つに定まらない。

コンテクストにより決定

あいまい≠ぼんやり

B or 13 像が無い

日常でも同様な現象がある。世界は、コンテクストの重なり合い

コンテクスト1とコンテクスト2が出会い重なる＝プリコラージュ

複数のコンテクストを引き受けるのはカタチ。

FはSにより決まらず、Sを喚起する。

複雑さの鍵はカタチが握っている

コルビジェの建築的取り組み

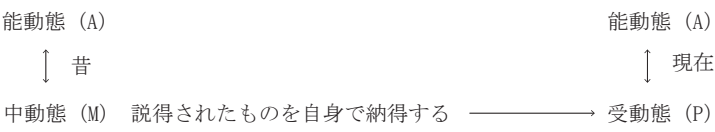
ガルシュでは多数のコンテクストが併存され、単一にしないことにより、幾度となく知覚の転換が起き、その都度更新されていく複雑な全体がつくられていく。



コンテクスチュアリズム…コンテクストの複雑性を引き受けることで、建築環境に豊かな多元性を与えようとするもの

- ①日常的な惰性や硬直を揺さぶるような芸術性を建築に与える方法 ー芸術的
- ②つねに過去の体積としてある都市への敬意をもった介入の方法 ー歴史的
- ③多様な背景を持つ人々がともに居られる場を創出する方法 ー社会学的

第10講 能動と受動ー建築設計の3つの社会性



外態…ある「様態」に対して外部からの作用が働くとき、この作用のことをいう。

内態…「外態」を受けた「様態」がそれ自身を座として「変状」の過程に入っていくとき、この作用のことをいう。

第一の社会性…建築設計は、ひとりの建築家ではなく、異なる専門性や人格を持ったたくさんのエージェントが巻き込まれた系である

第二の社会性…こうしてつくられた作品は作者の手を離れ、社会に開かれ、時間の中でさまざまな介入を堆積させていく。

第三の社会性…建築家は、住宅を、地域を、都市をどんな未来や理想に向かってつくるのかという「幻視＝虚構」を構想し、宣言し続けなくてはならない。